

第 475 回 三水会便り <令和元年5月>

今月から平成の年号が変わり、「令和」となります。新しい年に出す三水会便りの第 1 号ということです。そして、三水会も新しく生まれ変わると思います。「万里の道も一歩から がんばれよ がんばれよ (瑞雲)」。

★4 月 17 日の例会の話し合い会合

4 月例会に先立ち、ルームに集まった会員有志が前月に引き続き、会の再建について意見を出し合った。その結果、集団体制で会を運営することを確認し、そのために総務、会計のほか、山行、例会、企画、広報などの係りを置き懸案事項を処理していくことで合意した。5 月例会 (5 月 17 日、金) も引き続き議論する。5 時 30 分に集まってほしい。早急に成案を得て 6 月から新しい体制で臨む。 担当：川俣俊一、高橋重之

★三水会例会

☆第 660 回例会

日 時：4 月 17 日 (水) 18:00～20:00

場 所：山岳会会議室

出席者：松田宏也 (演者)、石原康生、大野力弥、掛江正道、勝田房治、川島新太郎、川俣俊一、北口マリ子、清登緑郎、小泉義彦、塩澤厚、砂田定夫、征矢三樹、高芝一民、高橋郁子、高橋重之、高橋満男、武田幸男、田中恵美子、豊田茂、長谷川公子、平野幹雄、古市進、増田達治、<ゲスト>紺野会理、清水義浩、高島健三、中村玲子、中山茂樹、星征雅、溝部久美子 以上 31 名

JAC 千葉支部の松田宏也氏から、1982 年、市川山岳会の中国・四川省・ミニヤコンカ遠征に参加、九死に一生を得られて奇跡的に生還され、その後、驚異的な復活を遂げられて登山を続けられている「生きて還って、また登る」の話聞く。1) 1982 年春、7 名の隊員でミニヤコンカ峰 (7556m) へ、4 月 29 日、朝快晴、菅原信隊員と 2 名で C5(6800m)から 6:00、アタックに向かう。15:00 頃、頂上に達したと思われた頃からガス、天候悪化、クレバス近くにピッケルだけで雪洞を掘り(2 時間かかる)ビバーク。2 日間風雪とホワイトアウトの中、迷いながら下山、5 月 2 日、快晴で C5 に戻ることが出来たが、トランシーバーの故障でサポート隊とも連絡が取れず、食料も無くなり、下山を続けた。一方サポート隊は、登頂隊の 2 人が、疲労も激しく 2 日夜以降連絡もなく、下りてくる応答も無いため生存の可能性なしと判断し、5 月 5 日下山することを決定する (これが早すぎたと多くの非難を受ける)。松田隊員は C3(積雪で埋没)、C2 跡、C1 跡、BC 跡 (いずれも既に撤収) を辿り中国協力隊 CBC 跡付近 (2900m) で倒れていた所を、村の防災無線で遭難事故を聞いていた薬草「冬虫夏草」を採集の中国人家族に発見され、19 日ぶりに救出された。重度の凍傷で両手指と両脚を膝下 15 cm より切断。治療費 1200 万円は中国政府が負担してくれ、2 ヶ月後、帰国した。2) 1 種 1 級の身体障害者となるも、1983 年社会復帰後、会社業務のかたわら義足で登山を再開、1986 年、冬の富士山に単独登頂をして冬の登行の自信を取り戻した。1988 年、冬の北海道知床・斜里岳 (1545m) に登頂 (北海道放送の TV 番組の DVD を 25 分映写)。その後、春夏

秋冬、日本各地の山々を登り、スキーも始め、1995年8月～9月、チベット・シシヤパンマ峰(8027m)に遠征、7430mの最終キャンプまで達するという誠に驚異的な復活を遂げられて、現在も登山・スキーを楽しまれている。参加者30名。

係：塩澤 厚

☆第661回例会は、5月17日(金)(理事会と重なり変更にご注意)、昨年度のJAC秩父宮記念山岳賞を受けられた明治大学名誉教授、JAC千葉支部会員の小疇(こあぜ)尚先生より「東ヨーロッパ、ハイマツの山旅」の題でお話を伺います。多数のご参加をお願い致します。

係：塩澤 厚

★三水会山行

☆5月山行予報 5月21～22日1泊2日、北信濃・斑尾山(1382m)と周辺。

北陸新幹線・飯山駅午前10時集合。送迎付き、宿泊はペンション「まろうど」。1日目、袴岳(ブナ林と湿原)、歩行3時間半。2日目斑尾山、歩行4時間半程度。飯山駅に戻り解散。会費は交通費別で約11,000円。1～2名の追加が可能ですからお申込み下さい。連絡は増田(tatsujima3541@aroma.ocn.ne.jp、090-2462-7916)まで。係：増田達治